

時習義塾酒井如酔著、吉田晶三編輯、明治11年『府縣市街案内図全』

—絵図地図に見る明治初期城郭遺構の変遷、大分城跡、前橋城跡—

はじめに

『府縣市街案内図全』とされる明治11年編輯のアトラスを見出したのは5年ほど前である。期待したのは明治5年陸軍省城絵図との比較で、廃城前後の城跡の変遷を読み取る事であった。明治5年の陸軍省の調査により、明治6年に城郭の存廃が決定され、城郭の破壊が全国的に実施されたが、その頃の記録は非常に少ない。かろうじて、全国の県立文書館の一部に記録が残され、陸軍省城絵図の控図が由来不明のまま明治前期城絵図として残されるのみである。明治5年と11年の実測図は其の変遷と実態を知る手掛かりとなる。そのように期待した。

ところが、少し期待を裏切られた。つまり、陸軍省城絵図は以前にも紹介したように、調査年時である、明治5年3月から8月以前に陸軍軍営とされた城郭については、調査されていない。平成21年フランスで発見され、現在富原文庫の所蔵となっている絵図は91城郭128図である。国内に流入したときの画像データも109城郭173図であった。そしてこれらには中四国と前年4年12月の関東地区の城郭調査がほとんど含まれていない。此の当時軍営であった城郭とはほとんどが現在の県庁所在地であり、これから検証しようとする『府縣市街案内図』掲載都市と重なることになり、当初もくろんだ、明治5年と11年における城郭遺構比較は基本的に両資料に併催されている都市はなく、比較は非常に難しくなる。

1・明治11年『府縣市街案内図』と時習義塾酒井如酔

『府縣市街案内図』は明治10年4月5日板権免許、同11年12月10日出版、定価金八十五銭とある。編輯人は吉田晶三、出版人は中村熊次郎、東京書肆16軒、諸国書肆16軒で販売されている。収録地図は38図で、序文は明治11年11月、函山石川元輝撰、梧軒酒井虎とある。凡例は11年10月、編輯者は時習義塾吉田晶三とある。吉田は「1此原稿は先師酒井如酔翁の著述諸城市図と題し、時習義塾に蔵するところにして其図三百余紙あり、内三十余図を模縮み以て此図を作る然ど朽木（栃木）浦和の如き元駅邑の地は新に測絵を為し、而して三府三十五県の図を編輯す。」、又、府縣市街の形勢、その繁栄を示すを目的とし、地誌が付されているが今回は検討外とする。元原稿の作者、酒井如酔の作成諸城市図は全国300余とあり、現存していれば大変なことになるが、ここに2つ目の目論見である明治11年測量図との対比は崩れた。編纂は明治11年であるが、酒井の原図の年代が確定でないため、栃木と浦和以外の都市図は明治11年以前としか言えず、明治11年以前の地図として評価できるが、目的とする陸軍省城絵図明治5年との時代比較は難しい。酒井如酔は資料によれば、横山大観の祖父で名は酒井喜熙、水戸彰考館地図製作者、文政2年5月26日生まれ、明治13年8月28日没、1819－1880年とされる。徳川斉昭に登用され、明治元年1868年まで水戸藩士で伊能忠敬の弟子、水戸藩の海防に尽力、水戸藩領で測量を行い、多くの絵図を残している。長久保赤水没後の水戸地図学の家柄で5代酒井喜熙は関八州輿地路程全図や数百の絵図を編集、明治7年6月陸軍参謀局地図課によって私学開業願が出され、開塾された東京芝の時習義塾の塾長を務めた。この時習義塾は地図制作技術者の立ち遅れを水戸の技術で構築するべく開塾されたもので、明治政府に出仕した測量地図技術者福田治軒の教授をはじめ陸軍参謀局技術者を多く養成することとなった。幕末明治の地図関係者が大揃いとなる驚くべき組織である。

2・『府縣市街案内図』と府県統合、分県の時代

酒井如酔の諸城市図300余は残存不明であるが、おそらく幕末全国に存在した大名居城所在地の地形図に近いものと思われる。明治11年の『府縣市街案内図』の三府三十五県の図はどのように選択されたのであろうか。このころ府県の統治は頻繁に変遷を余儀なくされた。明治4年8月29日1871年10月13日廃藩置県によって1使3府302県となり、1871年12月10日、1872年2月10日明治5年1月2日には1使3府72県となった。1876年1月2日明治9年に最少の38府県になり、1888年明治21年には1庁3府43県となった。編輯当時、明治10年から11年の府県は最少の38府県であった。

収録明細は3府として東京市、京都市、大坂市、開港地として横浜市、兵庫神戸両港市坊、長崎市、新潟市が

挙げられている。後は浦和、千葉、水戸、朽木（栃木）、堺、津、名古屋、静岡、山梨、大津、岐阜、長野、仙台、福島、森岡（盛岡）、青森、山形、秋田、金沢、松江、岡山、広島、山口、和歌山、松山、高知、福岡、府内（大分）、熊本、鹿児島、前橋各市となっている。山梨市には今の甲府市が描かれ、府内市は大分市、堺市は当時の堺県（奈良県地域含む）の県庁所在地、金沢市は明治9年1876年に新川県（富山県地域）、敦賀県（福井県地域）を含む大石川県の県庁所在地、宇都宮県は栃木県と合併し県庁所在地は栃木市となった。埼玉県は岩槻市から浦和市となった。香川県は愛媛県に合併、阿波国も高知県に、鳥取県も島根県に、佐賀県は長崎県に、宮崎県は鹿児島県に含まれていた。これらは後に復活分県運動が行われ、富山、福井、奈良、鳥取、徳島、香川、佐賀、宮崎の8県となる。北海道と沖縄を除き、これにより、収録された38図は当時の県庁所在地となる。吉田は酒井如酔が編集した地図から県庁所在地の地図のみ編集したと判明した。なお、『府県市街案内図』は13x20cmの折丁仕立てで、厚ボール表紙であるが、用紙は薄い洋紙に銅版刷で開けるたびに折目が破損するため、今回は見開き20x26cmを30x42cmに拡大コピーし検証に用いた。同様の体裁のアトラスに明治元年の『刻大日本壽海全図』がある。こちらは藤淵臣撰で日本全国の詳細な海路図100枚が掲載されている。この時代の紙は良質とは言えないが、その時代にこのようなアトラスの存在が不思議である。明治という時代が必要としたのであろう。

3・府県市街案内図明治11年と陸軍省城絵図明治5年の比較 大分市・府内城

陸軍省城絵図は基本、当時軍営の所在地であったほとんどの県庁所在地は含まれていない。ところが、九州に於いては明治4年西海道鎮台が小倉本営と博多、日田分営、さらに西海道鎮台が廃止され、熊本に鎮西鎮台が設置された。明治6年では第6軍管区熊本鎮台歩兵第11旅団に小倉歩兵第12旅団、小倉には福岡の歩兵第24連隊が所属していた。ということで、陸軍省城絵図つまり、明治5年の城郭存廃調査に大分城、府内城は含まれることになり、絵図は残されることとなった。従って、陸軍省城絵図明治5年と『府県市街案内図』に含まれる豊後国府内市街之図の比較が可能になった。

豊後府内城については良質の絵図が20点余り残されている。重要文化財正保城絵図であり、8点の修理願絵図と多くの藩用図である。残念ながら明治6年の城郭存廃に伴う明治5年の陸軍省城絵図の控図は発見されていない。ここでは、最末期の遺構である明治5年測量図と明治11年、つまり、城郭破壊の前後の状況を探ってみたい。ただ、明治11年図は市街図であり、城郭図ではない。そこに比較の限界はある。又、府内城については正保城絵図以降、幕末まで多くの変遷が見られるがここでは触れない。

○本丸及び本丸北郭、南郭。陸軍省城絵図では北郭の人質櫓、扇櫓、東の丸との廊下門、南郭東方への枳形2の門、倉6基が残され、4-12の付番が付けられている。これは陸軍省城絵図の特長で、城郭の軍営利用の際の建築の再利用を目的とした調査である。明治11年市街図では本丸に旧城とあり、細部は判明しないが、わずか5年で本丸東側の堀は埋められ、東之丸とは地続きとなっている。○東之丸、西之丸。明治5年では東之丸御殿が1番の符号と旧知事住宅として残され、着到櫓西の丸方向の城門、倉が現存し、1-3番と20、21の付番がされている。明治11年図では建築は記載されていないが、西ノ丸北廊下橋周辺の堀が埋められ、地続きとなっている。明治5年には西ノ丸東南隅櫓、中央の喰い違い虎口石垣、東南廊下門建造物等11の建築が13-19、22-25番の付番がされている。西の丸北の廊下門は撤去されている。○北之丸、北之小丸。明治5年では東角2階櫓、西角2階櫓が現存、明治11年では南の堀、北之小丸西堀が忌められている。○三之丸。明治5年図では北の2重櫓、枳形門、西の枳形門、東南2階門等7基の建築が残されている。旧役所の書き込みと牢屋絵図が記されている。明治11年では三之丸北は堀や2本の土橋が埋められ、中島迄地続きとなる。特長的には三之丸南に堀を埋めて道路が形成された。明治5年図は以上城郭部分のみであるが、明治11年図は外郭も描かれる。正保城絵図と比較すると東南部の堀や郭、全体に街区の堀と土塁はよく残されている。ただ、西北部分のみ堀が消滅している。こうしてみると明治10年以前に城郭中心部は破城の跡が見られるが、外郭部はまだ残されていたといえる。そして、明治大正昭和前半の地図では本丸東之丸西之丸内の堀は埋められ、周辺の堀のみと外郭の堀が痕跡をとどめ、三之丸堀はすべて市街地に埋もれた。

此の検証により、『府縣市街案内図』は少なくとも、陸軍省城絵図調査より後の遺構を示していることが明らかとなり、明治11年編輯は大分市街については、明治5年以降であることが実証された。

4・府縣市街案内図と幕末城絵図の比較、前橋城跡について

前橋城については先に述べた理由、関東の調査先行で陸軍省城絵図は残されていない。ところが前橋城は利根川の浸食によって、明和4年1767年川越へ移転となり一旦廃城とされ、川越藩分領として前橋陣屋となったが、町は衰微し、町民の嘆願、献金もあり、廃城100年後、慶応3年1867年再築された。今日、後期前橋城と称され、明治4年廃藩置県まで5年間遺構は残された。今回はこの後期前橋城絵図との比較検証を実施したい。

ところが、明治11年は正式な県庁所在地は高崎市にある。なぜ、群馬県庁所在地として『府縣市街案内図』に前橋市が収録されたのか、経緯は複雑である。明治4年誕生した群馬県県庁は高崎市であったが、高崎城内に県庁があり、翌年城が兵部省に接收されたため、前橋に移転した。さらに翌年群馬県と入間県が合併し、熊谷県となり県庁は熊谷市に、さらに明治9年熊谷県が分割され、群馬県が誕生し、高崎市に県庁が戻された。しかし、高崎城は陸軍省に接收されたままで、前橋城内を仮庁舎とし、県庁を移転させた。そして正式に明治14年1月県庁を前橋として決定した。内密に進められたこの決定に高崎市は数千人が県庁に押しかけ騒然となったが、裁判より明治15年前橋県庁は確定した。現在、高崎市の人口は前橋市を上回り、現在群馬県一である。

比較するのは『上州群馬郡前橋城』（以下絵図と略す）と『府縣市街案内図』の上野国前橋市街之図である。○本丸。絵図には御本城とあり、東南と東北に櫓台、北に三の丸への土橋、本丸門に木橋、周囲に古土居と記入。市街図は旧城とされ、本丸虎口が土橋に代わっているように見える。○二の丸三の丸。絵図は本丸東西と南を二ノ御丸としているが、市街図は本丸東北の三ノ御丸をも含めて二ノ丸としている。兵法上はどちらも可能であるが、藩政時代の呼称を根拠とすれば、三の丸に二ノ丸と記される市街図は間違いである。両図とも遺構がよく残されているが、市街図では絵図にある二ノ御丸西南の櫓台が省略されている。○北曲輪。南に車橋御門丸馬出、櫓台、東北の枳形虎口が残されているが、絵図に見える西北土塁状の二基の櫓台が省略されている。記入されていないのか、消滅したものか判断できない。○南曲輪、外曲輪。本丸南から車橋御門外郭である。絵図に新制三日月御門とある南の丸馬出はよく残され、絵図に描かれた東南遺構、柿ノ宮御門枳形が消滅し、櫓台阿弥陀山や東南土塁上の櫓台三基は記入されない。大手御門の三角馬出、北の方形張り出し横矢以降、坪呂岩御門遺構、も残存している。前橋城跡に於いては利根川に沿う部分に絵図にある遺構が確認できない以外、明治11年まで主要な城郭の縄張りはほとんど残存していたとみられる。櫓台が記入されていないのは市街図の縮尺の制限で記入できなかっただけであろう。しかし、このようによく残された遺構も明治末年には県庁となった本丸の土塁と堀他を残すのみで、今は県庁周辺に大規模な土塁を残すのみである。

まとめ

今回は陸軍省城絵図との比較で大分城跡、幕末城絵図との比較で前橋城跡を検証した。わずか5年で中心部の市街地化が見られる大分市、逆に当時は中心部はよく残された前橋市、対照的な結果となった。『府縣市街案内図』は基本市街地図であって、城郭図ではない。富原文庫は全国の城郭跡の変遷を求めて、幕末から明治、大正、戦前の市街地図に城郭跡を求めてきた。その数数千枚に上る。ただ、今回のような明治10年ごろまでの市街地図は非常に少ない。そういった意味でこの38枚の都市図は貴重であった。出会いの感激は今までも忘れない。市街地図という限界はあるが、大分、前橋以外にも、水戸、津、静岡、福島、山形、秋田、松江、岡山、広島、和歌山、高知等堀が防衛の主体である平城については、同様の検証の意味があると思われる。最後に明治11年新規測量の栃木市、浦和市と幕末の新興都市山口市を図示しておきたい。